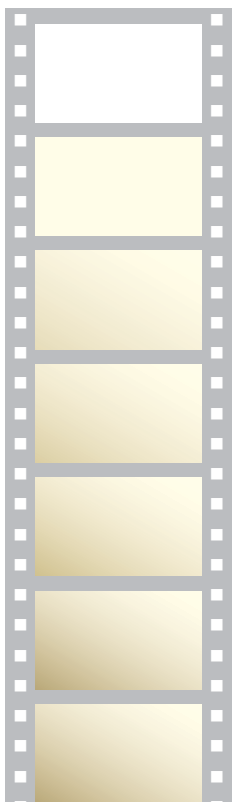


伸^{ノブ}さんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第二十一回 「純愛の70ミリミュージカル」

名古屋には、5年間住んでいましたが、大都市だけに立派な建物があり、街並を見ると、その土地のエネルギーを感じました。

昭和30年代に地下鉄が走り、名古屋にはテレビ塔があり、また、長さが100メートルではなく、幅が100メートルある「100メートル道路」もありました。

こんな大都市でぼくが楽しみだったのは、大型スクリーン、そして立体音響の設備の整った70ミリ映画常設館があり、そこで映画を観ることでした。

中学生になって、クラブ活動に卓球部を選び、ピンポンを数カ月やりましたが、何か性に合わず、すぐやめて「帰宅部」(授業が終わればまっすぐ家へ帰ることを選びました。宿題を終えてから映画雑誌「映画の友」を読むというよりも写真を眺めてはストーリーを考えて楽しむ、そんな中学生でした。ある日、町内会で同じ帰宅部で姓も同じ鈴木君が「話題のミュージカル映画が70ミリで上映中だから日曜日

に行こうぜ！」と誘ってくれたのです。

その映画館は、70ミリ映画を上映する専門劇場で、以前、母と「ベンハー」（59年製作・監督 ウイリアム・ワイラー、主演・チャールトン・ヘストン）を見た劇場でした。

フィルムには、8ミリ、16ミリ、35ミリ、70ミリなどがあり、フィルムの幅が広いほうが情報をたくさん入れることができます。したがって、70ミリ映画は画面も大きく、サウンドもよく、同じ作品でもその倍、楽しめる機能を持っていることが特徴ですが、上映には専用の映写機が必要です。

鈴木君が誘ってくれた映画は11部門のアカデミー賞に輝く「ウェストサイド物語」（61年製作・監督 ジェローム・ロビンズ、ロバート・ワイズ）でした。予備知識もなく「序曲」が始まりました。（映画には基本的に予習は必要ありません。復習は必要ですが？）

黒い画面から口笛が聞こえてきました。本職は商業デザイナーなのに映画のタイ

トルデザインーとしても有名になった「ソウル・バス」がデザインした長くて黒い線や短い線が島のように点在し、画面の色が黄色や赤、そして青色に変化します。

「序曲」が終わると長短の黒い線が太くなり、なんとそれがニューヨーク、マンハッタン島の空撮映像だったのには驚きました。（ほかにソウル・バスの映画タイトルで有名な作品は、「黄金の腕」「大いなる西部」「北北西に進路を取れ」「サイコ」「栄光への脱出」などがあります）

カメラは空撮のままイーストサイドからウエストサイド方向へゆっくり移動します。すると、どこからともなくフィンガースナップ（指で音を鳴らすこと）が聞こえ、若者が一人から二人、二人から三人と増え、踊りが始まります。一方、違うグループも指を鳴らして登場！。二つのグループがウエストサイドで対立していることを画面だけで教えてくれます。

そのグループは、ヨーロッパ系移民の「ジェット団」とプエルトリコ系の「シャーク団」。「ジェット団」にばかにされた「シャーク団」のリーダー（ジョージ・チャ

キリス）が赤れんがの建物を拳でたたき、カメラをにらむ（つまり映画を観ている人を）シーンは、いまでも目に浮びます。いざこざのあと、若者たちは自分たちの気持ちを書きます。

初めてこの映画を観た時、「世の中にこんな映画もあったのだ」と思いましたが、映画の復習でこれが「ミュージカル」という映画のジャンルのひとつであることを知りました。ストーリーは、二つのグループの抗争のなかで、ジェット団のトミー（リチャード・ベイマー）とシャーク団のリーダー、ベルナルドの妹、マリア（ナタリー・ウッド）の純愛を描き、ラストは悲しい結末を迎えます。そして、これを機に対立抗争は終わるのです。（シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」の現代版とは、復習で知りました。）2時間31分の上映時間が瞬く間に過ぎ、エンドマークが出て劇場内が明るくなった時、ぼくと鈴木君はお互い顔を見合わせ、入れ替えもなかったのです、おなががすいているのもかまわず、人差指を立て、続けてもう一度鑑賞したのです。そして、この純愛ミュージカル映画は、中学時代のぼくの心の写

真に永遠に焼き付いたのです。

伸 了

平成
23年
6月